

こういう実験があります。

子どもに一匹の蝶を見せて、「よくこの蝶を見てごらん」と言って観察させます。その蝶の羽に黄色い色をした縞模様があったとします。

「黄色」とか「縞模様」という言葉をすでに知っている子どもは、その色を見て、「この蝶は黄色い」と覚えるのです。縞模様があると「この蝶には縞がある」と記憶するのです。

ところが、黄色とか縞模様という言葉を知らない子どもは、黄色い色を見ても「黄色い」と認識することができません。色も縞模様も、もちろん目に入るけれども、言葉を知っているか知らないかによって、黄色とか縞模様とかの意識が起こらないのです。

しばらくして、「さっき見た蝶、このたくさんの蝶々の中にいるんだけど、どの蝶だったか当ててごらん」と言って当てさせます。

すると、言葉を知っている子どもは、ちゃんと正しく言い当てることができるけれども、言葉を知らない子どもはまったくわかりません。

言葉を知っているということは、ものを見るときに言葉を通して見るということです。言葉を通さないと意識になりません。言葉がなければ、ただ黄色い色を見たからといって、黄色だったという記憶は起こらない

のです。言葉があって初めて「ああ、黄色い」という記憶が残るのです。

人間というものは、いくら体験を積んでも、それを言葉を通して認識するということをしないと、知識は蓄積されないのです。

子どもの頭の中にたくさんの言葉があるということは、ものを見るときにそういう複雑な言葉をいろいろ使って、自分の体験を頭の中に認識させていることなのです。脳を活性化するのに、言葉がいかに重要かがわかると思います。